
戦国BASARA ~ 暁の姫君 ~

キノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦国BASARA〜暁の姫君〜

【Nコード】

N9737Y

【作者名】

キノ

【あらすじ】

あることがきっかけで死んでしまった二人の少女

変な神様に転生された世界は -

ハチャメチャな戦国時代だった

戦国BASARAにオリキャラ投入

駄文上等な方はどうぞ御覧ください

プロローグ（前書き）

文才？何それ美味しいの

ブローグ

人にはそれぞれ転機というものがある例えば結婚、出世、思わぬ事故や病気、と様々だ

とにかく人には転機が絶対と言っていいほど訪れる。

当然この俺

しろぬいあかね
「不知火茜」にもだ

自分のことを「俺」と言っているがれっきとした女だ

友達には「女の子らしくない」とか「乱暴すぎる」とか言われるけど女だ

まあそんなわけで俺は今人生の転機を迎えている訳だ

彩乃「ねえ茜、本当にいいの？」

幼なじみで親友の彩乃が俺に心配そうに訪ねる

茜「ああ」

彩乃「後悔しない？」

茜「しねえよ、んなもん」

俺は今屋上にある奴を呼び出している

そいつは - 俺の彼氏だ

きっかけは彩乃が持ってきた写真だった

茜「なんだあ？こりゃあ」

彩乃が持ってきたのは何枚もの写真だった

それもどっからどうみても盗撮率100%のアングルで撮られているものばかりであった

茜「彩乃、お前はどやってこんなもんとるんだ？」

彩乃「禁則事項です？」

茜「・・・」

こいつはいつもこうだ

ある日彩乃の家に遊びに行ったら引き出しの中から写真が出てきた。

見てみると俺の着替え中の写真から寝顔までとにかく俺でうめつくされていた

どっやって撮ったかの前に何故撮ったか問い詰めると

「茜の可愛さを末代まで遺りたいから」の一点張り

だからって盗撮は犯罪ですよ彩乃さん

茜「で？盗撮犯、今日はなにを撮りやがった？」

彩乃「盗撮犯とは酷いにや」

私はただ茜の可愛さを「それはもういいから（茜）」・・・はい「」

彩乃は持ってきた写真を俺に見せてきた

茜「なんだあ？こりゃあ」

そこには今付き合ってる彼氏がいた

彼氏といっても

告白されてテンパった俺が了承しちゃったただけだな

・・・だって告白されたのなんて初めてだったし

とにかくまあその彼氏が写ってる写真を見るとそこには・

俺とは別の女と手をつないで楽しそうに笑っているあいつがいた

写真は三枚あるのだが三枚とも別の女だった

つまりは4股

俺の彼氏はどうやら浮気をしていたらしい

前からそんな噂はあったがこれが決定的な証拠だろう

俺は写真を持って席を立ち上がった

彩乃「茜？」

茜「行くぞ彩乃」

彩乃「行くつてどこに？」

茜「屋上にあいつを呼び出す」

彩乃「それで？」

茜「殴つて別れる」

彩乃「極端！？」

そんなわけで俺は今屋上にいる

彼氏と別れるために

彩乃「ねえ茜、大丈夫なの？」

茜「なにが？」

彩乃「殴っちゃって大丈夫？」

茜「あんな奴にはそんぐらいして当然だろ」

彩乃「でももし怒ってキレられたら」

茜「そんな時は・・・そんな時だ」

そんな会話をしていると屋上の入口が開いた

DQN「なにに？茜、俺に話って」

何？デートの話？

彩乃ちゃんもチヨリース」

俺は無言で写真を投げつけた

それを拾いあげる“元”彼氏

DQN「！！！！待て！茜これh「おらぁ！（茜）ドゴオ」ぐふう
！？」

俺は渾身のハイキックをそいつの側頭部に食らわせる

彩乃「蹴った！？」

食らった勢いで地面に倒れる

そして蹴った勢いで俺もバランスを崩した

茜「しまっ！」

丁度フェンスにもたれかかり身体を支えられるはずだった

ガゴッ

茜「・・・え？」

もたれかかったフェンスが古くなっていたのか鈍い音を立てて外れる
そして俺もそのまま後ろに倒れていく

茜「（ああ、これ死んだな）」
俺は覚悟を決めて目を瞑った

「茜え！！！」

ガシッ

茜「!!!!」

誰かが俺の腕を掴んだ

それは彩乃だった

屋上から宙吊りになっている俺の腕を両手でしっかりと掴んでくれていた

茜「すまん彩乃、助かった」

彩乃「全くこの子は、今引き上げてあげるからね」

茜「おう、頼む」

彩乃が俺を引き上げている時だった

ドン

彩乃「へっ？」

誰かが彩乃の背中を押した

押された彩乃はそのまま前のめりに倒れていく

そしてその体は屋上の外へとびたした

茜・彩乃「へっ?」

当然腕を捕まれている俺も一緒に落ちる事になる

茜・彩乃「うわあああ!!」

落ちているときに俺が見たのは

屋上からこちらを笑いながら見つめる元カレの姿だった

第一話（前書き）

第一話始まりです

第一話

茜「うつ・・・うーん」

俺が目を覚ますとそこは白一色の世界だった

この表現は間違っではない

空、地面、背景、全てが真っ白だった

建物もなにも無くてまさしく白というにふさわしかった。

ふと隣を見ると彩乃が横たわっていた

茜「彩乃、おい彩乃！」

彩乃「うにゅ、あれ何で茜が私のベッドに？
私茜の事攻略した？
それともされちゃった？」

茜「わけわからん事言っでないで周りを見ってみろ」

彩乃はまわりをキョロキョロと周りを見渡した

彩乃「おおー真っ白だー」

茜「ああ、本当にな」

彩乃「この白さ・・・例えるなら・・・」

茜「例えるなら？」

彩乃「茜の部屋の引き出しにあった下g「そおい！（茜）ゴッ」きやいん！」

俺は力を込めた拳骨を彩乃の後頭部にお見舞いした

茜「てめえを俺の部屋に入れたことねえのにいつの間にスネークしてやがりましたかあ！？」

彩乃「フフツ私のスネーク力は53万でs・・・ちよっ！ごめん謝る、謝るから殴らんというて！」

俺は握り拳をなんとか抑えた

茜「お前、マジで警察に通報するぞ」

彩乃「私には茜のすべてを知る権利があるのだよ！」

茜「そんな権利てめえに与えたつもりはねえよ」

彩乃「それでも私は茜のすべてを知っている！

茜が小さいころ誕生日にお母さんに買ってもらった熊のぬいぐるみを今も大切に飾っている事や、本棚には可愛い犬や猫の写真集があること！それか」

茜「それ以上しゃべればてめえを殺して差し上げるぜい！！」

俺が彩乃の口を塞いで言ったその時だった

???「それは無理だよ」

声をした方を見ると色鮮やかな着物をきた少女が降りてきた

少女「殺すなんてできないよ、もう死んでるんだから」

少女は降りてくるなり俺たちにそう言い放った

茜「誰だ？お前」

彩乃「ていうか死んでるってなに？」

少女「うんまあそうなるよね、でも大丈夫ちゃんと教えてあげるからね」

少女は何故か無い胸を張って言った

茜「何故そこで胸をはる？」

少女「まず最初に私は神です（・ω・）キリッ」

茜・彩乃「ふーん」

少女「あれ？それだけ？」

茜「いやあ、神様っていろいろいるんだなあ
こんな少女みたいなとか」

彩乃「びっくりだよ、見た目は小学一年生か幼稚園の年長組なのにね」

ロリ神「やめてそれ以上言わないで泣きたくなるから・・・ってロリ神ってなんだこらあ！」

茜「で？ロリ神、俺達が死んでるってどういうことだ？」

ロリ神「ロリ神って言うな！・・・まあさっきも言ったとおり貴女たち二人は死んじゃってます。死因は分かってるよね」

茜「屋上から落とされた」

ロリ神「そのとおり、屋上から落とされて二人仲良く漬れたトマトみたいになっちゃいました」

茜「軽いな」

彩乃「私達はこれからどうなるの？」

ロリ神「その事なんだけど」

実は二人が死んだのはこっち側のミスでね
運命を操る神が間違えて殺しちゃったんだよね」

茜「で？」

ロリ神「今から二人には異世界に転生してもらいます」

彩乃「異世界？」

ロリ神「戦国BASARAっていうゲームの世界なんだけど・・・知ってる？」

茜「なんだ？そりゃあ」

彩乃「私PSP版なら持つてるよ。家康が超かつこいいよね！」

ロリ神「何言つてんの？三成だろ」K」

彩乃「何おう！？貴様にはあの筋肉のよさがわからんのか！」

ロリ神「貴様こそあの剣さばきの渋さがわからんのかね！」

二人は俺を放置してなにやら言い争いを始めた

茜「お前ら俺を置いて行くな」俺の微妙な視線に気付いたのかロリ神はコホンと咳払いをした

ロリ神「まあとりあえずそこに転生してもらうわけだけどそれぞれがどんな立場で転生するか説明するねー」

茜「やつぱそこが一番大事だよな」

ロリ神「え」とまず茜さんは戦闘民族「不知火」の族長の娘として転生します。

名前は変わりません」

茜「不知火？」

ロリ神「山奥にひっそりと暮らしてる大人数の民族だよ」

彩乃「私は？」

ロリ神「彩乃さんは忍びの長「服部半蔵」の娘、「服部彩乃」として忍びの里に転生してもらっよ」

彩乃「そーなのかー」

ロリ神「二人とも運動能力とかその他諸々チートにしてるけど・・・まあその辺は後々分かるよ」

茜「質問」

ロリ神「はい不知火さん」

茜「俺と彩乃は会えなくなるのか？」

ロリ神「大丈夫だよ、不知火は忍びと交流があるから10才になれば会えるよ」

茜「つまりは10才まで会えないって事か」

彩乃「茜」

彩乃が涙目でこちらを見つめてくる

俺は彩乃の頭を優しく撫でてやった

茜「大丈夫だ。すぐあえる」

彩乃「でも」

茜「10才になったら会えるんだからそれまで我慢だ。だから・・・」

笑えよ」

彩乃「グスツ・・・うん、すぐ行く。飛んでいく。クンカクンカしに行く。」

茜「いやクンカクンカはしなくていいから」

俺もこの時溢れそうな涙を抑えていた

ロリ神「はいはいキマシキマシ」

台無しだ

ロリ神「そんじゃあそろそろ良いよね。

あっちの世界は私が色々弄ってるからねー

絶対おもしろいことになるよ。」

そんじゃあ、いつてらっしい？」

ロリ神が指を鳴らすと俺達の足下から無数の光が溢れだしてきた

茜「うお!？」

彩乃「にゃ!？」

その光が俺の頭の先まで包んだとき

- 意識は闇に消えた -

二人を送り出した後ロリ神は顔に笑みを浮かべていた

ロリ神「さあて、転生者が歴史を変えるか、それとも時代の波にのまれるか・・・面白くなってきたねえ？」

目を覚ますと俺は知らない女の人に抱かれていた。

まるで産まれたての赤ん坊の様に。

いや、実際今の俺の身体は赤ん坊なのだろう

腕や足を見てみるとよくわかる。

俺の体はこんなに小さくはなかった

ということはこの女の人は・・・

女「見てあなた、この子私の事を見てるわ」

奥から男の人がでてきた

男「お前が母親だと分かっているのだろう」

女「ほら、目もとなんて貴方そっくり」

男「いや、どちらかと言うとお前に似ていると思うが?」

女「もー、せつかく気を使ってあげてるのに」

男「それはすまなかったな」

やはりこの二人は俺の両親のようだ

母「この子が将来不知火を背負って行くのね」

父「ああ」

父親が俺を抱きかかえる

暖かい。

俺は小さいころ両親を事故でなくして6才まで孤児院でそだてられた

だから親のぬくもりなんて知らなかった

でも今は分かる、これが親のぬくもりなんだって

そう思うと何故か泣きたくなってきた

オンギヤア!、オンギヤア!、

父「どうした? 茜」

母「貴方の顔が怖かったんじゃないありませんか?」

父「・・・人が気にしていることを・・・」

母「あら、事実じゃありません？」

そんな会話をしながらも二人は楽しそうだった

そしてそれを見ていると俺も楽しくなった。

第一話（後書き）

ここまでをプロローグにすればよかった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9737y/>

戦国BASARA～暁の姫君～

2011年12月2日20時53分発行